The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学業困難な生徒を抱える学校における英語科指導法 : 大阪市立中学校教育研究会英語部研究発表会講演資料から
Author(s)	山岡, 賢三
Citation	大阪大学教育学年報. 2018, 23, p. 223-229
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67874
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

学業困難な生徒を抱える学校における英語科指導法
―大阪市立中学校教育研究会英語部研究発表会講演資料から―

山　岡　賢　三

【要旨】

本稿は、2017年２月25日大阪市立中学校教育研究会英語部から、大阪市学校活性化推進事業「がんばる先生支援」研究発表会での講演を依頼されたときの講演資料を元に作成されたものである。

英語科教師が授業に行き詰まりを感じる場面を想定し、学業困難な生徒をどう指導したらよいか、具体的な指導法（授業を受けるときのルール作り、Warm-upの工夫、Reading指導の工夫、ペアワークやグループワークをするときの工夫）を紹介する。

また、授業とは何か、学習意欲を向上させる要因な何か、生徒との信頼関係がいかに生徒の学習意欲に影響を及ぼすかといった教育の根本的な問題まで言及し、学業困難な生徒をどう指導したらよいか悩む現場教師へアドバイスとエールを送る。

1. はじめに

大阪市立中学校教育研究会英語部研究発表会の主催者から依頼された講演の内容は「授業に行き詰まったときのヒントを教えてほしい」だった。どこの学校でも、低学力や無気力な生徒など学業困難な生徒をどう指導したらよいのか悩んでいるという。筆者が1978年新任教師として大阪市の中学校に赴任したとき、授業に興味を示さない学業困難な生徒たちを目の前にして、どうすればこの生徒たちの目を授業に向けさせることができるのかと悪戦苦闘したものである。40年経っても教師の悩みは同じだと改めて思い知らされた。

文科省は「小中高を通じて、コミュニケーション能力を育成」という基本的な考え方を掲げ、小中高を通じた外国語教育の充実のために学習指導要領の改訂を行った。小学校では2011年度から外国語活動（英語）が導入され、中学入学時にはすでに英語の学力差ができていて、中学１年生の生徒は以前のように英語に興味を示さなくなった。中学校では2012年度から英語の授業時数が週３コマから４コマになった。同時に教える量も増え内容も難しくなり、授業についていけない生徒も増えた。また、高等学校では2013年度から「授業は生徒の理解程度に応じた英語を用いて行うことを基本とする」ことが明示され、「英語の授業は英語で行う」という学習指導要領の理念と現実とのギャップに悩む教師も多い。そんな中、学業困難な生徒を抱える中学校・高等学校の現場では、筆者が新任教師だった40年前以上に教師の悩みは深まっているのではないかと推察できる。

さて、教師はどんな時に授業に行き詰りを感じるのだろうか？「①生徒が指導に従わない、②生徒が授業に興味を示さない、③学力がしんどい生徒の指導がわからない」が考えられる。①は学級が崩壊し、教師のコントロールが全く効かない状態である。1980年代の荒れた学校を経験した筆者は、こんな状態に陥った学校では、教師は何をやってもうまくいかない情けなさや、何もできない無力感を感じるだろうと想像できる。英語の授業だけでなく、まずは学校で正常な授業が提供できることが大前提である。②については、大いに

教師に責任があると考える。生徒が授業を聞いてくれないのは、生徒に問題があると決めつける教師もいるが、教師はプロである限り、どんな生徒であっても退屈させない授業を提供できているか自問自答すべきである。③については、いわゆる低学力の生徒だけなく、LDやADHDなど様々な症状を抱えている生徒もいることだから、それぞれの特性を知りながら、授業を組み立てる必要があるだろう。

2. 授業とは

授業は「縦の糸」と「横の糸」で成り立っている。つまり、「縦の糸」とは規律やルールであり、「横の糸」とは指導法や教材そして教師の工夫である。その二つの糸がうまく重なり合って素晴らしい授業が展開できると信じている。筆者が大阪市教育センターの指導主事として勤務していたとき、たくさんの授業を参観し指導助言をしてきた。その中で新任のA教諭とB教諭の例を紹介しよう。

A教諭はアメリカの大学での留学経験もあり、TESOLの資格（Teaching English to Speakers of Other Languagesの略で、英語が母国語ではない人々向けの英語教授法に関する資格）も持ち、英語教育に非常に熱心な教師だった。授業では自らが留学で学んだ理論や指導法を実践で生かそうと様々な工夫を凝らしていた。しかしながら生徒は全くA教諭の思うようにならず、A教諭の指導は空回りだった。アクティビティをしても生徒は大声を出して勝手に動き回る、A教諭は怒鳴っても生徒は言うことを聞かない。授業のコントロールが全くできていなかったのである。

B教諭は柔道の有段者、見ただけで威圧感があった。B教諭の赴任校は生徒指導困難校であったが、B教諭の授業だけは整然と授業が成り立っていた。しかし、英語の授業でありながら、英語は聞かれず、先生の指示もすべて日本語で行われ、文法訳読中心の旧態依然とした授業だった。授業が終わって反省会があった。B教諭から「授業に英語のゲームを導入して、楽しい授業にしようとは思うのですが、生徒が乗ってこなくて困っています。どうすればよいでしょうか？」という質問を受けた。「あなたが怖いからですよ」と思わず言ってしまった。

つまり、A教諭の授業では「縦の糸」が不足し、B教諭の授業では「横の糸」が欠けていた。A教諭の授業とB教諭の授業がうまく混ざり合っていれば、とても良い授業になるだろうと思った。両教諭とも当時まだ新任、今ではいろいろな学校で経験し、お互いの足らないところを埋めながら素晴らしい教師になってくれていることだろう。

次に高校の授業を参観したときのC教諭の事例を紹介する。文科省が2013年12月13日に出した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、「高等学校の授業を英語で行うとともに言語活動を高度化」とある。高等学校学習指導要領にも「授業は生徒の理解程度に応じた英語を用いて行うことを基本とする」とある。C教諭の授業はこのことが頭にあり、すべて英語で授業が行われていた。流れるような流暢な英語で授業が進められ、C教諭も得意気であった。しかし、授業をよく見ると、生徒の半分は寝ていた。生徒の英語による発話はほとんどなく、C教諭の英語だけが教室に響き渡っていた。

C教諭の場合、「生徒の理解程度に応じた英語を用いて」という配慮がなく、教師の一方的な英語に対し、生徒は反応することなく、授業が成り立っていない状態だった。C教諭自体は「授業を英語で行う」ことが実現でき自己満足に酔いしれていた。英語の授業では教師は基本的に英語を使うべきではあるが、教師の一方的な発話であってはいけない。一番大切なことは生徒に英語を使わせることである。

授業は、教師が一方的に生徒に教え込むのではなく、教師の発問に対して生徒が応答し、またその応答に対して教師が発問を繰り返す、そんな生徒の教師と生徒との相互作用によって授業が深まっていくのである。

教師が、授業がうまくいったと確信する瞬間は、生徒のイキイキとした顔を観たときである。つまり、授業とは教師と生徒の協働作業である。

3. 英語の授業での工夫

3-1 授業を受けるときのルール作り

生徒をコントロールできない、どうすればよいか？　学校が荒れたり、学級崩壊が起こってからではなかなか正常な状態に戻すことは難しい。筆者の経験では、荒れた学年を卒業させた後、二度と荒れた学年を作らないという固い決意の元、新入生を迎えた学年の教師集団が授業を受けるときの共通のルールを決め、どの授業でも全員の教師がそのルールに従って１年生の初めから生徒を指導した。そこに英語の授業独自のルールを付け加えたものが以下の英語の授業を受けるときのルールである。

- 姿勢正しく。
- 机の上の整頓、机の横には物を置かない。（机間巡視の邪魔にならないように）
- 手はひざの上に、指示があるまで鉛筆を持たない。
- 先生が話し出したら先生に集中。（英語の発音を指導しているときは先生の口元を見る）
- 英語で発話するときは大声で、先生の話や他の生徒の発表は静かに聞く。
- 英語の授業ではペアで活動する。誰とペアになっても仲良く活動をする。（１年からペア活動をしていると３年になっても自然にできる）
- 合図で動く。授業中英語で指示を出しながら合図を出し、慣れてきたら合図だけで生徒を動かす。例えば、先生が口元に人差し指を立てたら、Please be quiet!

簡単なルールではあるが、新１年生の初めから習慣化するように徹底すると、自然に正しく授業を受ける姿勢を養うことができる。これが３年間授業を受ける基本となる。教師が大声を出して怒鳴ならなくても生徒は教師の指示をよく聞く。一方､生徒をコントロールできていない授業では､授業を受ける基本姿勢が育っていないので、教師の指示は全く通らない。

朝の学活で読書活動を導入することによって、生徒が落ち着き、１時間目の授業がスムーズに入れるようになったという報告をよく聞く。これは読書活動を習慣化することによって、生徒が落ち着いて授業に入る準備ができた例である。生徒に授業を受ける正しい姿勢を身につけさせる方法は、要するに習慣化することである。最初は面倒ではあるが、３年間正常な授業ができることを考えればたやすいことである。

3-2 Warm-upの工夫

授業の最初から集中しない、どうすればよいか？　実際の授業では、前の時間に体育の授業で疲れていたり、行事前で落ち着かなかったり、昼からの授業で眠かったりと様々な状況が考えられる。今から英語の授業は始まるという気持ちの切り替えが必要である。そこで授業の初めのWarm-upを紹介する。

＜英語でキャッチボール＞

- 全員起立
- 教師が英語で質問
- わかった生徒は挙手
- 教師がボールを目標の生徒に投げる

• ボールを受けた生徒が英語で答える
• 正しく答えた生徒は着席
• 既習の英文を使って質問
• 本時のテーマについて質問

このWarm-upでは実際にボールやぬいぐるみを使って、教師と生徒のキャッチボールがなされる。全員起立させるので、授業が始まったと全員が意識する。次に英語で質問し、答えた生徒だけが着席できるので、競争心をあおることができる。生徒に覚えさせたい大切な英語の質問は毎回の授業で使い定着させることができる。前の時間に習った英文を使い復習として使える。本時のテーマについて質問することによって、ブレーンストーミングになる。

＜ビンゴ＞
• 既習の単語をシートに書かせる。（予習）
• 教師は英語を読み、生徒はシートに書いた英単語にチェックを入れる。
• 縦、横、斜めそろったらビンゴ。
• 同じシートを新しいシートとして使う。教師は日本語を読み、生徒は英単語に別の色でチェックを入れる。
• 毎時間授業の最初にWarm Upとして５分行う。
• ビンゴになった生徒には賞品を渡す。

ワード・ビンゴを考案した長（1997）は「ビンゴゲームでは生徒が夢中になる。しかも、語彙が自然に身につく」[(1)]と述べている。この効果を実感している英語教師も多い。その理由として、ビンゴは毎時間授業の最初にWarm Upとして使え、楽しみながら単語を覚えることができる。ビンゴの利点として、何より注目したいのは、英語の苦手な生徒でも勝者になれるということである。つまり、日常の授業では英語のできる生徒が目立つが、このときばかりは苦手な生徒も目立てるのである。筆者の経験から生徒指導困難校でもビンゴだけはうまくいった。

3-3 Reading指導の工夫

英文を読むとき生徒が声を出さない。どうすればよいか？　生徒が声を出さない理由として、「英語が読めない」「読むのが面倒だ」が考えられる。そもそも英語が読めないと英語の授業に参加できない。全く意味不明の文字と１時間向き合う辛さを考えると、英語が読めない生徒にとって英語の授業は苦痛以外の何ものでもない。

Listening、Speaking、Reading、Writingという４技能の中で、授業ではReading、特に音読の指導を中心にすべきだと考えている（図１参照）。吉田（2005）は「発音の訓練をすることによって聞き取りがよくなることが実験で確かめられており、・・・英語を学習する時には、恥ずかしがらずにできるだけ声を出し、正確な発音を身につけることがリスニング・スピーキング能力に繋がる」[(2)]と述べている。つまり、音読指導を授業の中心に据えることによって、リスニング力やスピーキング力も鍛えることができ、さらにライティング力にも影響する。同時通訳者の國弘（2011）は「声を出さないで英語を勉強している人の英語力は、かわいそうなほど伸びません」[(3)]と、脳科学者の川島（2012）は「（英語の音読は）脳を鍛えて『英語回路』をつくる」[(4)]と音読指導の重要性を説いている。

図１

英語が読めない生徒にとって、たとえローマ字の知識があったとしても、例えば、中学１年生の最初に出てくるGood morning!は読めない。音と文字を結びつけるフォニックスの指導が必要となってくる。フォニックスとは英語において、綴り字と発音との間に規則性を明示し、正しい読み方の学習を容易にさせる方法の一つである。ここでは詳しくは紹介しないが、初期の英語学習者にとって大切な学習方法である。

次に英語を読むのが面倒だと考えている生徒に英語を読ませる指導法を紹介する。

＜30秒音読＞

- ペアで：読む人（正確に読む）、チェックする人（間違いをチェック）
- 30秒ごとに交代
- 読めたところの続きを読む
- ３交代（計３分）
- たくさん読めたペアが優勝

30秒音読の効果としては、「①ペアで協力するので頑張れる、②ちゃんと読まなければ相手に悪い、③しっかりと発音しなければ相手に聞こえない、③役割を果たすことの達成感が得られる」が考えられる。

3-4　ペアワークやグループワークをするときの工夫

ペアワークやグループワークがうまく行かない、どうすればよいか？　ペアワークやグループワークはコミュニケーション活動や生徒同士の教え合い活動、協働作業を目的とするとき効果的である。また、ペアワークやグループワークでは、生徒はピアープレッシャー（仲間からの圧力）を感じながら一人ではできないことを仲間といっしょにやり遂げようとする、生徒同士が助け合ったり教えあったりする、学力のしんどい生徒も仲間といっしょに活動できるという利点がある。しかし、嫌な者同士ペアを組まない、グループを作るのに時間がかかる、生徒が活動に熱中すると教師の指示が聞こえない、生徒が勝手な行動をするなど生徒のコントロールがきかなくなることが問題となる。そんなときは、ペアワーク、グループワークをするときのルールを決め、習慣化させることである。

例えば、ペアやグループの作るには、図２のように、教師が「ペアA」と指示を出せば、席の隣同士がペアとなる。「ペアB」と指示を出せば、前後の席の者同士がペアとなる。「ペアC」と指示を出せば、斜めの席の者同士がペアとなる。「グループD」と指示を出せば、前後左右の席の者が４人でグループを作る。このような指示を１年生当初から導入すると、生徒は習慣化し、ペアやグループの仲間を選り好みすることな

く、指示だけで生徒は簡単にペアやグループを作れるようになる。

アクティビティから静かにさせるには、日ごろから教師が指示を出したときの態度と生徒同士が活動するときの行動にメリハリをつける訓練をすることである。とは言っても、生徒が積極的にアクティビティに参加し興奮すると、先生の指示が聞こえない。そんな時、教師はいくら大声で怒鳴っても無駄である。教師の指示を聞いて欲しい、アクティビティは終わって教師に集中させたい、そんなときの合図を決めておく。例えば、教師が口の前に人指を置くサインを送ったとき生徒は静かにする。サインを見た生徒は他の気づいていない生徒に同じサインを送る。生徒同士がサインを送っている間にクラス全体が静かになる。また、先生がベルを鳴らすと生徒は活動をやめて静かにするという指導を徹底している教師もいる。

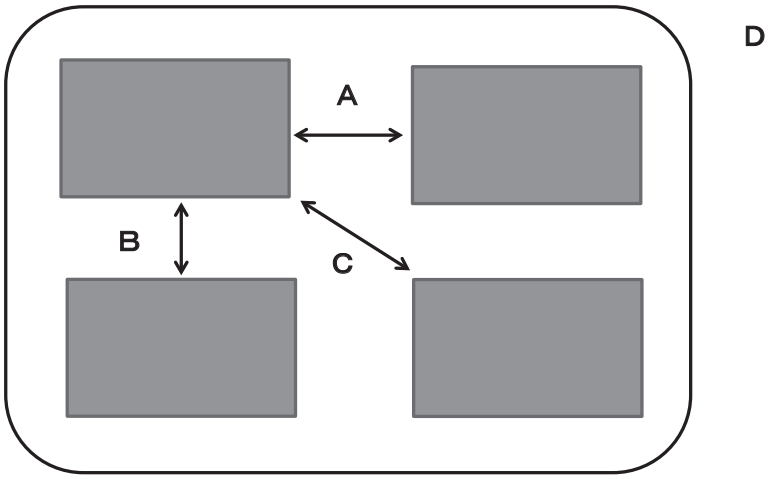

図 2

4. 学習意欲の向上

生徒に英語力をつけさせたい。どうすればよいか？　生徒に英語力をつけさせるためには、「①英語を好きにさせる、②英語にたくさん触れさせる、③飽きずに反復させる、④継続して学習する習慣をつけさせる」ことが大切である。「好きこそものの上手なれ」という言葉があるが、まずは英語を好きにさせることである。好きになれば、自ら英語にたくさん触れるし、飽きずに反復できる。継続して学習するようになる。

田尻（2009）は、生徒が自主的に学習する条件として、「①やり方が分かる、②力がつく活動・学習だと認める、③面白い、④上達が感じられる」[(5)]を挙げている。例えば、①先生にシャドーイングのやり方を学ぶ。効果的なシャドーイングのやり方がわかる。②先生に勧められた音読教材を使ってシャドーイングの練習をする。英文が上手に読めるようになり、力がつく学習だと認める。③授業中「発音が上手になったね」と先生にほめられて嬉しい。ネイティブと会話をして自分の英語が通じて面白い。④英検に合格したり、テストの成績が伸び上達を感じる。このような過程を経て生徒の自主的な学習意欲が向上していくのである。

富岡（2002）の「学習意欲に関する調査研究」[(6)]によれば、中学生・高校生が勉強に対する気持ちが「とてもやる気になる」と非常に肯定的な答えを得られたのは、「成績が上がったとき」「授業がおもしろいとき」「授業がよく分かるとき」だけではなく、「先生にほめられたとき」「自然にふれる体験をしたとき」「ライバルが見つかったとき」「友だちからはげまされたとき」「級や段、資格などを取ろうと思ったとき」などであ

る。さらに、高校生の特徴として、「将来行きたい学校がはっきりと決まったとき」「将来つきたい職業に関心を持ったとき」が突出していると述べている。つまり、生徒の学習意欲の向上や、自主的な学習につながる要因として、個人の成功体験や達成感、目標の発見といった内的要因だけでなく、教師の適切なアドバイスや指導・励まし、友だちの存在、学校や家庭の環境など外的な要因も大きいことが分かる。

5. おわりに

何をしてもうまくいかないとき、どうすればよいか？　前述の講演会主催者が依頼した「授業に行き詰まったときのヒントを教えてほしい」とはこういうときだろう。太田（2013）は「授業で困ったときどう対処するか、その方法を多く持っておくことが授業の腕を上げるために必要である。例えば、生徒が答えることができない時、できないのは困ったことではなく、チャンスと考える。今できないことがわかったのだから、指導することによって伸びる機会がやってきたととらえることができる」[(7)]と述べている。つまり、発想の転換である。教師にはそんな柔軟な発想が必要である。太田がいう授業で困ったときの引き出しを多く持つには場数を踏んで経験するしかない。または、いろいろな教師の授業を観たり、様々な研究会に足を運び自らを高めることである。

もう一方で、原点に戻ることを勧める。「あなたはなぜ教師になったのですか？」たぶん、ほとんどの教師は、「子どもが好きだから」「教えることが好きだから」「子どもの成長が見られるから」などと答えるだろう。このように自分が教師になったときの原点を見つめることで、今目の前にいる生徒とどう接したらいいか考えなおすことである。

「２．授業とは」で述べたように、「授業とは生徒と教師の協働作業である」という観点から見ると、授業が行き詰る理由は、「授業が教師の一方的な作業になっていないか？」「どの生徒にも目が行き届いるか？」「どの生徒もいきいき参加できる授業になっているか？」と問い直すことも大切である。一斉授業でうまくいかないときは、放課後や課外活動、クラブ活動などあらゆる学校での教育場面を捉え、一人ひとりの生徒へのきめ細かな指導を通して人間関係を作り、生徒との信頼関係を確立する。そんな信頼関係を元に授業に臨むことである。地道ではあるが、授業がうまくいくには、生徒との良好な関係を築くとともに、授業がうまくなるための弛まない努力しかない。

長年の教師生活の中で、学業困難な生徒が教師の指導やアドバイス、励ましによって、人生の目標を見つけ、態度を一変し真面目に取り組む姿へと変貌を遂げた例を数多く見てきた。それは学力が向上したという意味だけではなく、生徒の生きる姿勢をいう。日々の教育活動を通して教師が生徒に植えつけた種は今すぐ咲かないかもしれないが、いつか色々な花を咲かしてくれるだろうと願う。どんな花であろうが、その花を見たときの喜び、これが教師の喜びであると信じる。

(注)

(1) 長　勝彦　1997 『英語教師の知恵袋　上巻』開隆堂，６頁
(2) 吉田晴世・松井久博　2005 『中高一貫英語教育成功の秘訣』松柏社，18頁
(3) 國弘正雄　2011 「英語習得の王道は『音読』」『英会話・ぜったい音読　入門編』講談社，21頁
(4) 川島隆太　2012 「脳を鍛えて『英語回路』をつくる」『超音読レッスン』IBC，22～34頁
(5) 田尻悟郎　2009 『(英語）授業改革論』教育出版，114頁
(6) 富岡賢治　2002 「学習意欲に関する調査研究」（文部科学省委託研究）学習意欲研究会
(7) 阿野幸一・太田　洋　2013 『日々の英語授業にひと工夫』大修館，45頁